

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】(小学校)

都道府県名	埼玉県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	川島町立伊草小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	0	12	19
児童数	60	61	77	63	59	74	0	394	

研究の概要

1. 研究主題

**子どものよさや可能性を引き出す学習指導の展開 ~  
確かな学力を身につけ、生きる力を育む学習活動をめざして~**

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

これまでの研究の成果と児童・保護者に対する実態調査の結果から、次のように取り組んだ。  
 1~6年生算数科での習熟度別学習を中心とした少人数指導の実施  
 (子どもの理解度に差が出やすい教科であるため)  
 1年生国語科での課題別少人数指導による学習、5年生国語科での習熟度別少人数指導の実施  
 (すべての教科の基礎的・基本的な力となる教科のため)  
 理科、音楽を中心とした教科担任制の導入  
 (子どものよさや可能性をより発揮させるため)

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ  <b>子どものよさや可能性を引き出す学習指導の展開                  ~ 基礎・基本の確実な定着から創造的な学習活動をめざして ~</b></p> <p>仮説                  本校では、平成9年度から5年間にわたって「子どものよさや可能性を引き出す学習指導の展開」を主題に、学校課題研究に取り組んできた。一人一人の児童は、それぞれがよさを持ち、限りない可能性を秘めている。児童は、そのよさや可能性を全教育活動の中で引き出されることにより、自分自身に自信を持つ。この自信は、次の学習活動へのさらなる意欲を生み、生き生きと自ら主体的に学習できるようになると考える。</p> <p>このように、児童が自分のよさや可能性に気づき、学ぶことの喜びに気づき、自分の力で一步一步成長しながら、「生きる力」を身につけていければ、確かな学力を身につけさせることができると言えよう。しかし、その前提として、学習における基礎・基本の確実な定着が図られなければ、このねらいは達成されない。</p> <p>研究内容・方法                  ( ) 理論研究                  児童一人一人のよさや可能性を引き出し、伸ばす指導の趣旨については、過去5年間の実践・研究に基づいているため、教師、児童、保護者や地域の人々とも共通認識をもつことができている。                  しかし、「学びのすすめ」にも示されたとおり、確かな学力を身につけるためには、まず「基礎・基本」の徹底を図ることが重要であり、そのための、より効果的な指導法、指導形態等を工夫していかなければならないことについては、十分な理解ができていない。そこで、「確かな学力」等についての理論研究を行った。</p> <p>(1) 校内研修会(各部会、各学年部ごとの研究会を含む)の実施</p>
--------	---

- ( 2 ) 外部指導者を招聘しての校内研修会の実施
- ( 3 ) 全教師が交代で先進校の授業研究会、発表会等に参加し、各校の長所を分析
- ( 4 ) 参考図書資料等を入手しての理論研究を行う、ほか
- ( ) 授業研究
  - ～少人数指導によるきめの細かい指導のための実践研究～
  - 外部指導者を招聘して、一人の教師が年間、最低でも3回以上の研究授業に取り組むことにより、効果的な指導法についての研究を深め、これを実践に生かしていく。
  - ( 1 ) 「国語科」での指導形態等の工夫
    - ・ 1～2 学年
      - 各クラスに2人の教師が入っての、いわゆるTT指導
      - 学年を5グループに分けての少人数指導
  - ( 2 ) 「算数科」での指導形態等の工夫
    - 全ての学年でいわゆるTT指導形態を活用し、その上で、さらに効果的な指導形態の在り方についての実践研究
    - 3 学年以上で、習熟度別指導を導入
    - ・ 第1 学年
      - 各クラスごとにTT指導の後、順を追って難易度の高い学習内容の教室へと移動していくチャレンジアップ式少人数指導
    - ・ 第2 学年
      - 各クラスごとに、座席等をもとに2つのグループに分かれての少人数指導(自分で決めて選ぶ習熟度別授業への移行的な取り組み)
    - ・ 第3 学年
      - 各クラスごとに、座席等をもとに2つのグループに分かれての少人数指導
      - 児童自身に決めさせ、学年で3つのグループに分かれての習熟度別少人数指導
    - ・ 第4 学年
      - 各クラスごとに、座席等をもとに2つのグループに分かれての少人数指導
      - 各クラスごとに、児童自身に決めさせ、2つのグループに分かれての習熟度別少人数指導
      - 児童自身に決めさせ、学年で4つのグループに分かれての習熟度別少人数指導
    - ・ 第5 学年～第6 学年
      - 児童自身に決めさせ、学年が4つのグループに分かれての習熟度別少人数指導
  - ( 3 ) 「総合的な学習の時間」での指導形態等を工夫(第3～6 学年)
    - 学年全体が4～6グループ(各グループ内も細分化)に分かれての少人数指導
  - ( 4 ) その他の教科等の授業研究
    - ・ 生活科授業では、学年全体を4人の教師がチームを組んでの課題別少人数指導、第1 学年では教師3人がチームを組み、テレビ会議システムを利用した遠隔地授業を取り入れた授業の実施
    - ・ 第5 学年家庭科では、コンピュータを活用したTT指導を実施
    - ・ 第5 学年理科、6 学年社会科では、教師3人が、チームを組みテレビ会議システムを利用した遠隔地授業を取り入れた授業を実施
- ( ) 学力調査研究
  - 児童の学力について、指導の効果がどのように現れてくるのかを調査研究する。
  - ( 1 ) 学力テストの実施・活用
  - ( 2 ) 単元前テストの導入、実施・活用
  - ( 3 ) 単元末テストの実施・活用
- ( ) 児童や保護者等の意識調査研究
  - 本校の取り組みに対する児童や保護者の意識調査を実施し、その後の指導に生かす。
  - ( 1 ) 全校児童の意識調査を実施、活用
  - ( 2 ) 全校児童の保護者の意識調査を実施、活用
  - ( 3 ) 教師の意識調査を実施・活用、ほか

平成  
15  
年度

子どものよさや可能性を引き出す学習指導の展開

～ 確かな学力を身につけ、生きる力を育む学習活動をめざして ～

研究の見通し

個に応じた指導を考え、子ども一人一人のよさや可能性を引き出す指導方法を工夫、改善することにより、確かな学力を培い、生きる力を育むことができるであろう。

研究内容・方法

- ( ) 理論研究
  - ( 1 ) 校内研修会（各部会、各学年ごとの研究会を含む）の実施
  - ( 2 ) 外部指導者を招聘しての校内研修会の実施
  - ( 3 ) 先進校の授業研究会、発表会等に参加し、長所の分析
  - ( 4 ) 参考図書資料等を入手しての理論研究、ほか
- ( ) 授業研究
  - ( 1 ) 学習スキルを身につけさせるための取り組み等  
これまでの指導法、指導形態等をさらに工夫していくとともに「基礎・基本」の確実な定着を図るため、児童に学習のスキルを身につけさせる。そのための教材開発や評価の仕方について、工夫する。
  - ( 2 ) 効果的な評価方法についての研究及び実践  
よりよい評価規準の見直し（単元の評価規準、本時の評価規準）  
児童の自己評価能力を育成するための研究
  - ( 3 ) 発展的な学習のための指導法の研究、教材開発  
学力調査結果による指導法の改善  
発展的な学習のための教材開発と指導法の研究
  - ( 4 ) 各教科等での取り組み
    - 「算数科」での取り組み
      - ・ 全ての学年での効果的な少人数指導の研究及び実践（3年生以上の学年で、習熟度別指導の研究及び実践）
      - ・ 基礎・基本の確実な定着のための教材開発
    - 「国語科」での取り組み
      - ・ 効果的な少人数指導の研究及び実践
      - ・ 基礎・基本の確実な定着のための教材開発
      - ・ 読書意欲を高めるための指導法の研究
  - ( 5 ) 全学年での交換授業と教科担任制を導入しての取り組み
  - ( 6 ) コンピュータの活用とテレビ会議システムを利用した遠隔地授業を活用しての効果的な授業の研究及び実践
  - ( 7 ) その他の取り組み等  
総合的な学習の時間や生活科授業等での効果的な少人数指導法についての研究及び実践  
全校児童がいっしょに取り組む「群読」等を取り入れながらの研究及び実践  
地域の教育力（教育ボランティア等）をいただきながらの効果的な指導のための研究及び実践、等
- ( ) 学力調査研究
  - 児童の学力について、指導の効果がどのように現れてくるのかを調査研究する。
  - ( 1 ) 学力テストの実施・活用
  - ( 2 ) コ・ス決定のために自己診断テストを実施・活用（既習内容の振り返りテスト）
  - ( 3 ) 単元の途中での小テストを導入、実施・活用（選択コ・スを途中で変更する場合の参考資料として）
  - ( 4 ) 単元後の診断的テストの実施・活用
- ( ) 児童や保護者等の意識調査研究
  - 本校の取り組みに対する児童や保護者等の意識調査を実施し、その後の指導に生かす。
  - ( 1 ) 全校児童の意識調査を実施、活用
  - ( 2 ) 全校児童の保護者の意識調査を実施、活用
  - ( 3 ) 地域の人々（代表者5名の方々）からの意見収集を実施、活用

《新規導入改善：  
『地域の中の伊草小』という観点から、地域の人々の意見もとり入れた研究実践とするために、新しく導入した。》

(4) 教師の意識調査を実施、活用、ほか

平成  
16  
年度

テーマ  
「子どものよさや可能性を引き出す学習指導の展開」

研究の見通し  
児童の実態を把握した上で、きめ細かな個に応じた指導を考え、子ども一人一人のよさや可能性を引き出す指導方法を工夫、改善することにより、確かな学力を培い、生きる力を育むことができるであろう。

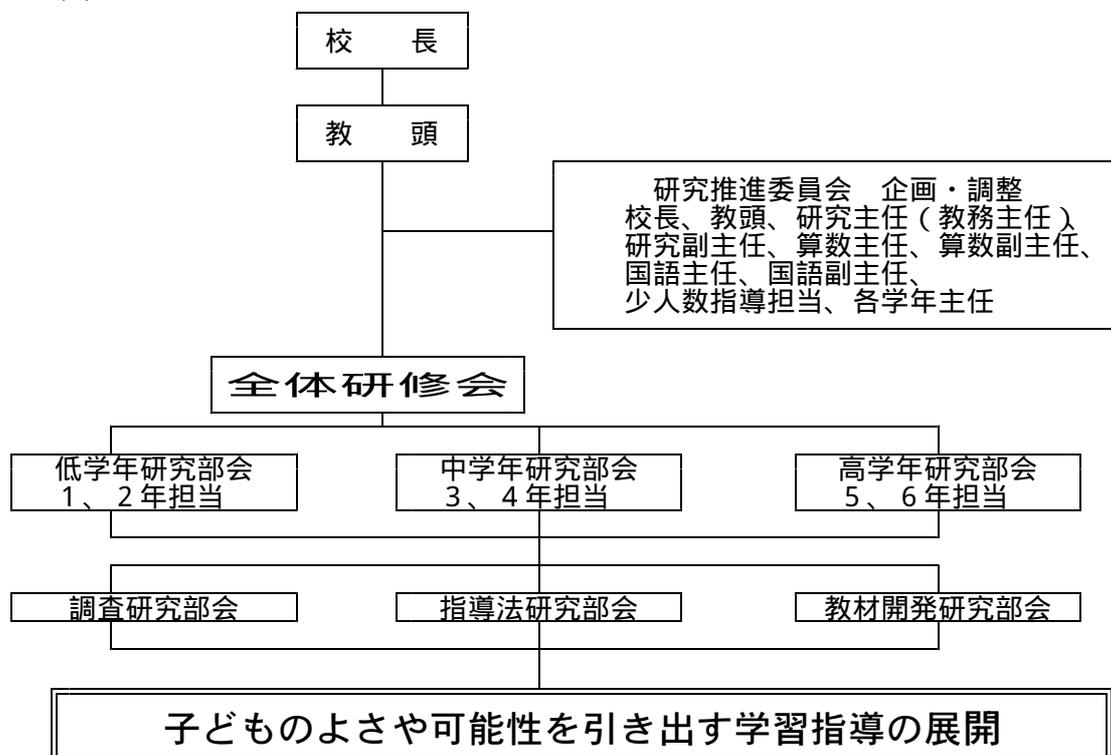
研究内容・方法

- ( ) 理論研究
  - (1) 平成15年12月一部改正 学習指導要領を生かすための理論研究をはじめとする校内研修会(各部・学年ごとの研究会を含む)の実施
  - (2) 外部指導者を招聘しての校内研修会の実施
  - (3) 授業研究会・発表会等に参加し、長所の分析
  - (4) 参考図書資料等を入手しての理論研究、ほか
- ( ) 授業研究
  - (1) 学習スキルを身につけさせるための取り組み等  
これまでの指導法、指導形態等をさらに工夫していくとともに「基礎・基本」の確実な定着を図るため、児童に学習のスキルを身につけ定着させる。そのための教材開発や評価の仕方について、より工夫する。  
また、校舎改築による教室数の減少に伴い、限られた施設・設備での効果的な少人数指導の在り方についても工夫、実践していく。
  - (2) より効果的な評価方法についての研究及び実践  
よりよい評価規準の見直し(単元の評価規準、本時の評価規準)  
児童の自己評価能力を育成するための研究
  - (3) 発展的な学習のための指導法の研究、教材開発  
学力調査結果による指導法の改善  
発展的な学習のための教材開発と指導法の研究
  - (4) 各教科等での取り組み
    - 「算数科」での取り組み
      - ・ 全ての学年での効果的な少人数指導の研究及び実践(3年生以上の学年で、習熟度別指導の研究及び実践)
      - ・ 基礎・基本の確実な定着のための教材開発
    - 「国語科」での取り組み
      - ・ 効果的な少人数指導の研究及び実践
      - ・ 基礎・基本の確実な定着のための教材開発
      - ・ 読書意欲を高めるための指導法の研究
  - (5) 全学年での交換授業と教科担任制を導入しての取り組み
  - (6) コンピュータの活用とテレビ会議システムを利用した遠隔地授業を活用しての効果的な授業の研究及び実践
  - (7) その他の取り組み等  
総合的な学習の時間や生活科授業等での効果的な少人数指導法についての研究及び実践  
全校児童がいっしょに取り組む「群読」等を取り入れながらの研究及び実践  
地域の教育力(教育ボランティア等)をいただきながらの効果的な指導のための研究及び実践、等
- ( ) 学力調査研究  
児童の学力について、指導の効果がどのように現れてくるのかを3年間の継続調査から研究する。
  - (1) 学力テストの実施・活用
  - (2) コ・ス決定のために自己診断テストを実施・活用(既習内容の振り返りテスト)
  - (3) 単元の途中での小テストを導入、実施・活用(選択コ・スを途中で変更する場合の参考資料として)
  - (4) 単元後の診断的テストの実施・活用
- ( ) 児童や保護者等の意識調査研究

本校の取り組みに対する児童や保護者等の意識調査を3年間継続実施し、その後の指導に生かす。

- (1) 全校児童の意識調査を実施、活用
- (2) 全校児童の保護者の意識調査を実施、活用
- (3) 地域の人々からの意見収集を実施、活用
- (4) 教師の意識調査を実施、活用、ほか

(3) 研究推進体制



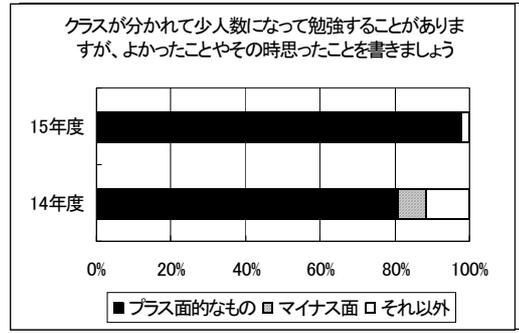
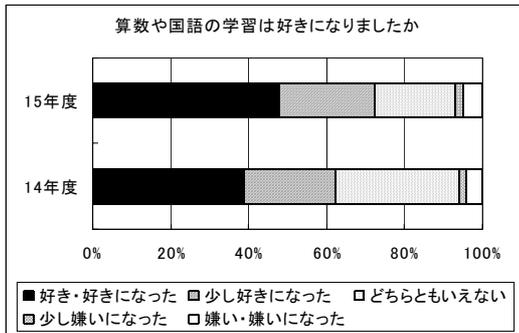
研究部の主な研究・活動内容等

研 究 部 会		
調査研究部	教材開発研究部	指導法研究部
学力調査・分析 意識調査・分析等 (保護者・児童ほか) 改善： 《地域の人々の代表5名の方々からも本校の取り組みについて意見を頂き研究に生かす》	基礎的・基本的な学習についての理論研究・推進 基礎的・基本的な学習のための教材開発と推進(「詩・学びタイム」等を含む) 発展的な学習、補充的な学習を支えるための教材開発と推進(「わくわく教室」等を含む) 「スキルタイム」の計画・推進等 改善： 《長期休業中の補充学習「わくわく教室」や、基礎・基本の力を養うための「スキルタイム」を実施》	指導計画作成 効果的な少人数指導の方法研究 遠隔地授業の活用についての研究 よりよい評価規準の作成や評価方法についての研究・推進等 改善： 《学校内に学習に関する掲示や表示を行うとともに、評価の方法についても指導案の中にも明記するなど、具体的な評価方法についても、より工夫する》

## 平成15年度の研究成果及び今後の課題

### 1. 研究成果

- (1) 少人数指導を導入したこと、また、よりきめの細かい指導を工夫してきたことにより、児童が課題解決的な学習を身につけられるようになってきた。
- (2) 児童が、習熟度別授業などの少人数指導での授業を分かり易く感じ、意欲的に取り組むようになってきた。  
(平成14年度およそ86%の児童→平成15年度98%〈12ポイントアップ〉の児童が、少人数授業を効果的だと感じている。)
- (3) 児童の学習に対する意欲が、昨年度よりもさらに高まった。



#### (記述内容の一部抜粋)

少人数の学習ではどんどん手をあげて発表できるのでぼくにはとてもよかった。算数の勉強の仕方がよくなったことです。先生の教え方もわかりやすいです。このやり方は、自分のペースに合わせることができるのでいいと思います。だからこのまま続けてやってみたいです。コース別で自分の実力をそのコースで出せて少ない人数で自分の意見をはっきり言えました。手を挙げる回数も多くなって、課題やまとめなどもしっかりとおさえることができるようになりました。

- (4) 学力調査の結果から、児童一人一人の知識・理解・技能の力が高まったと共に、学校全体で総体的に向上している。
- (5) 保護者が、本校の取り組みについて一層関心を寄せると共に、取り組みについて支持するようになった。  
(平成14年度およそ80%の保護者→平成15年度およそ90%〈10ポイントアップ〉の保護者が、少人数指導により「子どもの学習意欲が高まった。」と感じている。)
- (6) 教師が、今まで以上に自分の役割を自覚して、毎日の効果的な指導のための工夫・改善を行うようになった。
- (7) 教師が、より深く教材研究を進め、さらに効果的な指導を実践できるよう努力するようになった。
- (8) 本校の取り組みを普及させるために、今年度は、1学期、2学期に実施した公開授業や他校への説明など、学力向上のための取り組みについて紹介することができた。  
また、本校ホームページ内に「学力向上フロンティアスクール」についての項目も増設でき、全国に向け本校の取り組みを公開できる機会を作れた。  
(<http://www5.ocn.ne.jp/~igusa/>)
- (9) 1学期中に各学年が1回ずつ研究授業を行い、6月・11月の2回の公開授業研究会を開催できたことは、教師にも子どもにも大きな力となった。
- (10) 6月にテレビ埼玉の「サタデー930」で、本校の習熟度別の授業の様子が放映された。コース別学習に対する子ども達の素直な声が好評であった。指導の成果が認められたものと考えたい。
- (11) 「学力向上フロンティアスクールだより」が発行され、保護者に取り組みの様子をより詳しく知らせることができた。学校の取り組みを見守っている保護者に適切な情報提供ができたのはよかった。
- (12) 地域の方々へも授業を公開できたことにより、本校の研究を地域ぐるみで支持する旨の言葉をいただくことができた。

### 2. 今後の課題

- (1) 児童が、自分に合った習熟度別コースを的確に選択できるようにするためにも、日々の授業においての『自己評価力』を高めるための工夫を今後も研究する必要がある。
- (2) 学習遅熟傾向にある児童の、基礎・基本を徹底させるためのさらなる工夫や、発展的な学習を支えるための教材開発等がさらに必要である。

- (3) 昨年度は、研究がやや指導形態に偏りがちだったので、特に算数科、国語科では、指導法そのものについて研究を進めてきた。今後も、よりきめの細かい指導法について、さらに研究を進めていく必要がある。
- (4) 成果をより客観的に測定するための、評価の仕方についてのさらなる研究を進める必要がある。
- (5) 本校児童の実態に合った、より効果的な指導形態についての研究を進めているが、余裕教室が少ない中での取り組み等についても工夫していく必要がある。

#### 学力等把握のための学校としての取り組み

- 1 第2学年以上が、学力テスト（国語科・算数科）を実施
  - ・児童の学力向上の様子をより客観的に把握するために、原則1学期末実施
- 2 各学年で、単元毎の学習成果の把握（単元末テスト等による把握）
- 3 全校児童対象の学力向上に関する意識調査の実施
- 4 全校児童の保護者対象の学力向上に関する意識調査の実施
- 5 地域の人々から、本校の学力向上への取り組みに関する意見収集の実施
  - ・2、3、4ともに、学力向上の成果を把握すると共に、本校の取り組みについて客観的な意見等を収集・調査して、さらなる研究に生かすため、原則3学期初旬に実施
- 6 職員が、本研究に関する振り返り等を実施
  - ・学力向上のための研究実践の在り方や工夫改善方法について、全職員が毎学期末に実施

#### フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- \* 町内を中心とした近隣小・中学校を対象とした授業研究会を予定  
（実施時期：平成16年度2学期、場所：本校、対象：対象小中学校教職員、目的等：さらなる、学力向上のための研究の在り方をつかむと共に、学力向上のための取り組みの普及）
  - \* 説明会等  
保護者や地域の方々を対象とした授業公開  
（実施時期：平成16年度各学期、場所：本校、対象：保護者・地域の人々  
目的等：本校の学力向上のための取り組みのためのさらなる理解・協力を得ると共に、地域の教育力の向上、啓発・普及を図るため）
  - \* 研究成果普及のためのHPは、すでに公開中
  - \* 研究成果物等
    - ・平成14年度版、15年度版（追録版も作成）研究成果《研究紀要》を作成し、本県西部教育事務所管内の小・中学校をはじめ、高知県ほか他県の学校関係者へも提供済み。平成16年度版も作成予定。
  - \* フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動実績予定
    - ・平成15年7月鶴ヶ島市立南小学校（新フロンティア校）校内研修の指導を行った。
    - ・町内はもとより、東松山市、富士見市、所沢市、鳩山町、嵐山町ほかの小中学校の学力向上研究のために、助言・資料提供等を行った。
 今後も、習熟度別少人数指導のための方策や留意点等、学力向上のための普及活動に努める。
  - \* 研究成果の普及活動の成果
    - ・平成15年6月に実施した公開授業では、およそ150名。同、11月に実施した公開授業では、およそ300名の方々に、本取り組みについて普及できた。
    - ・本校のHPを平成15年11月に大幅リニューアル更新した。その後、平成16年2月13日現在で、6,767件のアクセスがあった。本校の学力向上に関する取り組みについて、関心を寄せる人々が多いことが分かった。
    - ・県内のみならず、高知県から来校された教師等他県の学校へも、本研究成果を普及することができた。
- （特に、国語科の習熟度別指導は、全国的にも目新しい研究であるということをも、文科省教科調査官、宮城教育大学教授・相澤秀夫先生より御指導いただいた。）

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】       15年度からの新規校       14年度からの継続校
- 【学校規模】               6学級以下                       7～12学級  
                                  13～18学級                       19～24学級  
                                  25学級以上
- 【指導体制】               少人数指導                       T・Tによる指導  
                                  一部教科担任制                       その他
- 【研究教科】               国語                       社会                       算数                       理科  
                                  生活                       音楽                       図画工作                       家庭  
                                  体育                       その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】       有       無